「日々の理科」（第 736 号） 2016（H28),-7,12

「浅草寺のほおずき市」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

毎年７月上旬に開かれる「浅草寺のほおずき市」私はよく意味も知らずに、毎年面白がって行っていた。浅草寺のホームページによると、こんないわれがあるようだ。（以下抜粋）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

７月１０日の功徳は千日分と最も多く、「千日詣」と呼ばれていましたが、浅草寺では享保年間（１７１６～３６）ごろより「四万六千日」と呼ばれるようになり、そのご利益は４６，０００日分（約１２６年分）に相当するといわれるようになりました。前日からの７月９・１０日の両日が四万六千日のご縁日と受け止められるようになりました。

また、この両日には「ほおずき市」が「四万六千日」のご縁日にちなんで開かれます。「ほおずきを水で鵜呑（うの）みにすると、大人は癪（しゃく）を切り、子どもは虫の気を去る」といわれるなど薬草として評判であったようです。もともと愛宕神社の縁日を四万六千日と呼んでいたのですが、やがて「四万六千日ならば浅草寺が本家本元」とされ、ほおずきの市が浅草寺境内にも立つようになり、かえって愛宕神社をしのぎ盛大になったと伝えられています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大変勉強になった。私が一番知りたかったのは「なぜ、ほおずきを売るのか」ということだったが、もともと「癇の虫を押さえる薬草」だったことがわかった。今では持ち帰ったほおずきは、もっぱら観賞用だが、江戸時代には、実際に薬用にしていたのだろう。

ほおずき市では、鉢植えのほおずきを、竹籠にぶらさげて売っている。協定があるようで、どの店でも一鉢二千五百円と決まっている。だが、お店の人と上手に交渉すると、千五百円ぐらいにしてくれることもある。しかし、もともと縁起物である。私はそのまま値切らないで買うことにしている。大抵は、きれいな風鈴などをつけて持たせてくれる。

鉢植えのほかにも、切り枝も売っている。江戸時代は、こういう姿で売るのが普通だったのだろう。値札には一本千円、二本千六百円と書いてある。私は鉢植えとは別に、これも買うことにした。絵の題材にしたかったからだ。二本頼んだら、何も交渉しないのに、千円にしてくれて、更に一本サービスしてくれた。

とても暑い日だったが、情緒豊かな「江戸の残り香（のこりが）」を感じることができた。